

研究ノート

## バリの風土と家系についての考察（Ⅳ）

松 原 正 道

### 序

筆者は、本研究紀要、第37号で、イスラム教徒の圧倒的に多いインドネシア共和国において、特異な存在を示す、ヒンドゥー（バラモン）教の世界であるバリ（島）との関わりで、ジャワ（島）、スマトラ（島）等のインドネシア地方へ、ヒンドゥー（バラモン）教がどのような経緯を以て浸透してきたかについて、歴史的観点からの考察を試みた。そして、また、仏教についても。

南アジア、東南アジア諸地方には、古くから、バラモン（ヒンドゥー）教の信仰があり、それに飽き足らないとして仏教が誕生、これは発祥の地インドにおけるよりも東南アジア、東アジア地方に浸透し、今日に至っている。

やがて、こうしたヒンドゥー（バラモン）教、仏教の世界に、後発のイスラム教が、インドを経由して東南アジア地方に伝播、今日、インドネシア、マレーシア、ブルネイ等の国々がこれを受容した国として存在する。

そして、その後の、西欧における大航海時代の波にのって、ポルトガル人、スペイン人によってもたらされたキリスト教、これは同教内部の対立抗争の中から生まれた、カトリックとプロテスタントとの形で、西欧における対立抗争を受けて、そのままの形で、アジアの地へ持ちこまれた。

その後、イギリス、フランス、オランダが、ポルトガル、スペインを後追いして、南アジア、東南アジアに進出、時に、宗教をからめて、また、それとは関係なく、その時々、利害得失に基いて、それぞれの国同士が、互いに相争うことになるのである。

そして、ヒンドゥー（バラモン）教、仏教、イスラム教、キリスト教、古来伝わる土着信仰、はたまた、中国伝来の思想等が混然として、この地方には存在しており、それと、植民地主義とその残滓とがからみあい、これまでも、度々、争いを生んできており、そして、現在においても、いろいろな問題を引きおこし、紛争の原因をなしていることは否定できない。

前号で、バリ（島）での爆破事件についてふれたが、その後、今日に至る間に、ジャカル

タにおいて、ホテルが爆破され、前事件に優るとも劣らない犠牲者を出した。

宗教に関心の薄い我々日本人にとって、信仰と日常生活との結びつきについて、仲々、理解し難いところがあるが、信仰に基いた生活上の一寸した行き違いが、宗教上の対立を生み、それが、時に、民族内での争いとなり、また、国家間の紛争へと発展することにもなることがある。

インドネシア国内にあって、最近は、報道されなくなったが、イスラム教徒とキリスト教徒との対立抗争が起こったアンボン島での事件、ここは、歴史的にも紛争があった所でもある。

また、インドネシア共和国が、長年、支配してきた東ティモールも、独立に際して、イスラム教徒とキリスト教徒とが対立、多くの人々が犠牲になったことについては、記憶にも新しい。

本稿では、ヒンドゥー（バラモン）教、仏教の世界であったインドネシア地方に、イスラム教が、どのような経緯を以て伝播し、かつ、浸透して行ったかと言うことを、歴史の経過の中で考察して行きたいと考えている。

特に、バリ（島）を中心に、ジャワ（島）、スマトラ（島）に焦点を当て、それを探るのが、本稿の目的である。

## 1

古くは、古代エジプトにおいて、神秘の国プントPunt（ソマリランド、あるいは、アラビアのアデン地方）からもたらされた物産の中に、南アジア、東南アジア特産の香辛料が含まれていたと言われている。<sup>(1)</sup>

歴史の父、ヘロドトスHerodotos(前484頃－425頃)も、その記述の中で、インドのことにふれている。<sup>(2)</sup>

アレクサンドロスAlexandros大王（前356－325 在位前336－）の東征により、広くヨーロッパ（ヘレニズム世界）において、インドの存在が、より明確化した。

そして、その際、彼の部将ネアルコスNearchos（？－前312頃）は、帰路、艦隊を率いて、インダス河から、ペルシア湾、紅海に至ったと伝えられている。<sup>(3)</sup>

ローマ時代になると、ストラボンStrabon（前64－後21頃）が、その著書、『ギリシア・ローマ地誌』の中で、インドについて述べており<sup>(4)</sup>、同様に、プリニウスPlinius(23<24)－79)も、その著『博物誌』の中で、インド、東南アジアに至る交易路についてふれている。<sup>(5)</sup>

そして、また、1世紀中頃のエジプト人と言われてはいるが、作者不詳の著書、『エリュトゥラー海案内記』にも、同時代の、紅海、ペルシア湾、インド洋周辺の海上貿易について述べている。<sup>(6)</sup>

2世紀になると、アレクサンドリアで活躍した、ギリシア人、プトレマイオスPtolemaios(年代不詳)が、その著書、『地理学』の中で、前号でもふれた、ヤヴァドヴィーバYavadbiva(大麦の国)についての記述をしている。<sup>(7)</sup>

このように、古代において、エジプトやヨーロッパ(ギリシア、ローマ)に知られていたインドや東南アジアの諸事情、また、そこに至る海上ルートを使って、1世紀末までには、ギリシア人やローマ人は、インドやセイロン(島)の辺りまで進出していた。

やがて、2世紀に入ると、東南アジアの人々に従って、マレー半島を周回して、インドシナ半島方面に達したと見られている。<sup>(8)</sup>

そして、2世紀後半になると、中国(後漢)では、太秦王安敦の名で知られているローマ皇帝、マルクス・マウレリウス・アントニヌスMarcus Aurelius Antoninus (121-180 在位161-)の使節が、絹の貿易を求めて、前漢の武帝が設けた郡名で、今日のヴェトナムのユエ(Hue 順化)付近に当る、日南に到着し、洛陽に達した(166)と言うことは、教科書にも載っていると言うように、世界史のうえでは有名な出来事である。

この時、使節が使ったのが、既に、開発されていた「海の道」であった。このように、古代社会における東西の雄、漢とローマとでは、互いに、それぞれの存在を認識しており、往来をしていた。それも、陸路ではなく、「海の道」を介して。

従って、古代以来、ヨーロッパ、西アジアと南アジア、東南アジア、そして、東アジアとの間には、人々の行き来があったと言うことであり、そこには、それぞれに、お互いを引きつける何かがあったと言うことである。それは、絹であり、宝石であり、香辛料であった。

そして、前号でもふれた、イスラム教が興った時と同じ頃、インドへ行き修行した、中国の仏教僧、義浄(635-713)は、広州からペルシア人の船でスマトラ(シュリーヴィジャヤ)へ行き、そこからは、シュリーヴィジャヤの船でインドへ向ったと言われている。<sup>(9)</sup>

このことは、イスラム教が誕生する以前から、既に、アラビアン・ナイトの主人公の一人である、シンドバッドのような航海者(冒険商人)が、東南アジアや中国にその活動範囲を広げていたと言うことを意味していることになる。

従って、イスラム教が興った後、その伝播のために、アレクサンドロス大王に見られる征服と言う形をとった陸路とは別に、より平和的に、「海の道」のルートを使っての東漸があったと言うことが充分理解出来る。

ただ、ペルシア湾から広州あたりの中国へ行くには、約1年かかり、往復では、2年の歳月を要したので、あらゆる面で、それに従った対応が必要で、その一例として、商人達の中には、中国に妻妾をかかえていた者が多かったと言う。<sup>(10)</sup>

そして、東西の交易路において、陸のそれには、アラビア人、ペルシア人、トルコ人、ソグド人等が通商に関わり、「海の道」では、アラビア人、ペルシア人、インド人等が大きな役

割を果した。

そこでの利益は莫大なもので、それ故、彼らは、その確保のために躍起となったのである。

そのために、後の話にはなるが、シンドバッドの冒険談の中には、主人公である彼が、数々の危険に遭遇する場面が多数登場する。

こうした、危険に度々遭遇する場面を強調することによって、話の舞台である地（海）域が、如何に危険な所であるかと言うことを人々に知らしめ、それによってそうした地（海）域に人を近寄らせないように牽制するためであり、そうすることで、自らの権益と利益の保持に努めていたと言うのである。<sup>(11)</sup>

このようなことが言われるように、この地（海）域での交易は、危険が伴いはするが、利益の多いものであったと言うことが言える。

そして、このことは、アラビアン・ナイトの時代以前についても、同様のことが言えると考えられる。

また、「アリババと40人の盗賊」の話にしても、物流の基本となる、「通商か、さもなくば、掠奪か」と言うことにつながることであり得ると言えるだろう。

人間にとって、未知なことを知りたいと言うことと、未知な物、珍奇な物を手に入れたいと言う、知的、あるいは、物質的欲求の充足を満たそうとする心理こそ、その行動の原点をなしていると言えるのであって、それを求めて人々は、遠距離、危険をかえりみず、未知の世界に向って旅をするのである。

そして、そこで、これまで知らなかったことを知り、未知な物、珍奇な物を、平和的に手に入れるか、はたまた、力を以てするかの違いはあっても、そうした品々を手に入れ、欲求を満たすことで満足するのである。

東西を結ぶ交通路として、古来、「絹の道」(Silk Road, Serica)や、「草原の道」(Steppe Road)を切り拓き、海上交通路としての「海の道」を探ってきたのである。

従って、そうした東西にわたる海の交通路は、イスラム教が興った7世紀には、既に、往来が盛んに行われていたのであって、アラビア半島に同教が興ると、それは、このような既に関与されていた交通路を経て、東へと伝播して行ったのである。

それ故、早くも、同世紀のうちにイスラム教は、陸路とは別に、インドへ伝わってきたのである。

6世紀になると、ビザンチン帝国とササン朝ペルシアとの対立が激しさを増し、それに従って、ペルシア湾を経由したイラン・シリアルートの東西交通路は次第に衰え、それに代って、インド洋から紅海、エジプト、パレスチナを経て地中海に出る交通路が盛んになった。

そのために、アラビア半島西部のメッカ、メジナ等が、東西仲継貿易の中心地の役割を果

し、これらは、商業都市として栄えた。

この点に関して、『砂漠の中のアラビア人』が、(中略)一度び海上航海の利益の報がもたらされるや、翕然として之に就く者増えたであろうことは想像に難からぬことである。然も、『砂漠の中のアラビア人』が忽ちにして『海のアラビア人』に転出せるところに彼らの敢為さが窺はれ、また危険なる航海に勇躍したところに彼らの積極的な民族精神が窺える。之は同じく牧畜を生業としたヘブライ人とは異なるところである<sup>(12)</sup>と、ヘブライ人と比較したアラビア人の特徴が指摘されるところである。

6世紀、隊商を組織し、国際的な商業取引を生業としていた、メッカの名門クライシュ族のハーシム家に生まれたマホメットMahomet, Muhammad (570頃-632)は、早くに両親を失ったため、若くして、『砂漠の中のアラビア人』として、『海のアラビア人』がもたらした物産を以て、取引を行っている隊商に加わり、生計を立てていた。

長じて、年長で、富裕な未亡人ハディジャKhadija (?-619)と結婚、その後も、商業活動に従事していた彼は、旅の途次出会ったユダヤ教やキリスト教の影響を受け、一神教的思考を深め、それと共に、偶像を崇拜する多神教信仰に基づく、旧来の社会の体制に疑問を抱くようになり、利益追求を目的とする商業活動の現実の生活から、次第に、精神世界への思いを強めるようになっていった。

40歳の頃、それまでの物心共に恵まれた生活を捨て、メッカ郊外のヒラー山に籠り、瞑想の日々を過ごすようになり、やがて、天啓を受け、『商業共和国』の新しい秩序<sup>(13)</sup>としての、唯一絶対神アラーを基調として、自らを、最後の預言者とした、文字通り、神への奉仕、服従を意味する、イスラム教を創始したのである。

そこには、神の前においては、部族や階級の差はなく、全ての人間は、皆平等であり、僧・俗の差別をせず、偶像崇拜を禁じ、神への絶対的帰依こそが、人々に救いをもたらす、最後の審判によって、信仰者は、楽園に入れると言う信条が存在していると言える。

そのため、殉教が讃美され、告白、礼拝、断食、喜捨、巡礼等の実践が重要な徳目として奨励された。

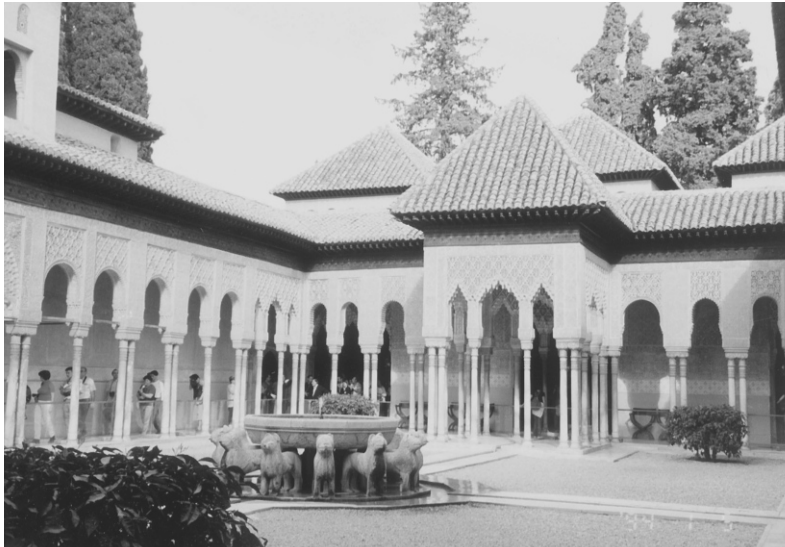
そうした特徴を持つ、イスラム教の在り方について、個人の救済を目的としたものではなく、交易商人の従うべき秩序である、古い部族社会の掟を越えて、人々を平等な相互扶助の共同体に再生させる集団主義の性格を色濃く持っていたと見ることが出来る。<sup>(14)</sup>

そのために、イスラム教は、貧民や奴隷の間には、急速に広まりはしたが、逆に、メッカの富裕層からは反発を買い、また、自らの部族からの激しい迫害を受けたため、マホメットは、622年、布教活動を、メッカからメジナへ移さなければならなかった(ヘジラHegira 聖遷 この年を以て、イスラム歴の元年とする。)

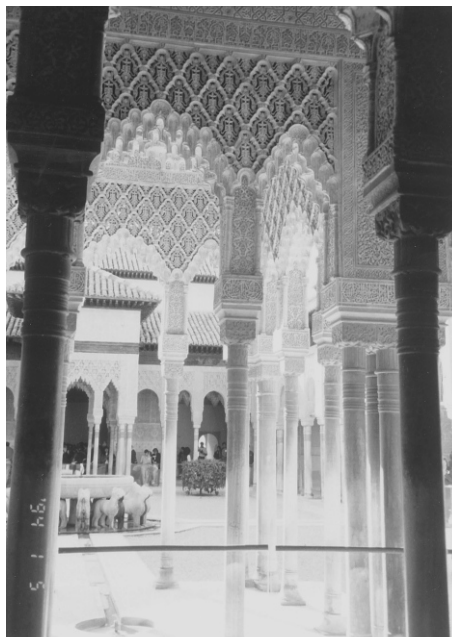
630年には、メッカを占領して全アラビアを統一し、アラビア人、ペルシア人、トルコ人等

によって、イスラム教は、西アジアを中心に各地に広まった。

8世紀末までには、北アフリカを経て、イベリア半島、フランスにまで、その勢力を伸ばしたが、フランク王国にはばまれて、ピレネー山脈の南にその勢力基盤を置き、15世紀末に、キリスト教による、レコンキスタ（再征服）の成功で、グラナダが陥落する（1492）までの間、ヨーロッパに、その勢力を誇示していたのである。



アルハンブラ宮殿（グラナダ・スペイン）



アルハンブラ宮殿  
（グラナダ・スペイン）



このように、その成立、発展過程において、絶えざる争いを経験せざるをえなかったイスラム教であるために、今日でも、「聖戦」(ジハード Jihad)とか、「殉教」と称し、対立する相手に対して厳しい態度で臨むこともある。

マホメットが新しい教えを説いた7世紀前半の時代、その出身地であるアラビア地方をめぐる周辺の勢力分布は、東西に分裂していたローマの西帝国は5世紀に滅亡し(476)、東ローマ(ビザンチン Byzantin)帝国が、教皇々帝主義をとり、コンスタンチノーブル(イスタンプール)を都とし、東欧、小アジア、西アジア一帯に勢力を振っていた。

これに対し、東方、今日のイランを中心とした地方、そこは、古来、拝火教と言われるゾロアスター教が栄えた地域であるが、当時は、ササン Sasan朝ペルシアがそれを奉じ、東のインド、西のビザンチン帝国と対峙していた。

そして、ビザンチン帝国とは、絶えず、領土をめぐる争い、時に、小アジアを席捲し、首都コンスタンチノーブルに迫る勢いを見せることもあり、両国は緊張状態にあった。

こうした両国の緊張状態が、イラン・シリアルートの交易路を不活発にし、アラビア海、紅海のルートを開発を促したと言うことになる。



沈黙の塔(風葬場)(ヤズド・イラン)

ササン朝ペルシアは、古代、同地にあった、アケメネス朝ペルシアがとった属州制を基盤にした中央集権体制をとり、ゾロアスター教を国教としていたが、インド国境付近では仏教が盛んで、ローマ人によりパレスチナを追われたユダヤ人や、異端とされたネストリウス派やアリウス派のキリスト教徒も沢山いた。

そして、これらの諸宗教から影響を受けてマニ教やマズダ教が興り、国内には多くの宗教が混在していた。

こうした諸宗教の混在と、長年にわたるビザンチン帝国との争いで疲弊を余儀なくされていたことが、同王朝の滅亡を早めることとなった。

ヤズデガルド Yazudgard 3 世 (? - 651 在位 632 -) の時、新興のイスラム軍との間に行われた、イラン西部のナハーワンドの戦い (632) で破れ、400 年余り続いたササン朝ペルシアが滅亡すると共に、イスラム教の陸路による東方進出の第一歩が大きく踏み出されたと言うことになる。

また、この間、ビザンチン帝国治下のシリア、パレスチナ、エジプト等もイスラム教の影響下に入った。

歴史上、ウマイヤ朝 (661 - 750) までのアラビア人中心の異民族支配時代をアラブ帝国と言い、アッバース朝 (750 - 1258) 以後、多くの民族がイスラム化して歴史に色々な形で、その役割を果たしてきたが、これをイスラム帝国と言って区別するのが普通である。

そして、「回教によるアラビア族の統一という事柄を看過し得ない。(中略) 回教がアラビア族の民族精神を生み出したのではなく、回教によって忽ちのうちに強大なる統一を見るに到るだけの歴史的基礎が築かれていたのである」<sup>(15)</sup>と言う指摘がなされるのである。

これに従えば、イスラム教が急速な拡大を示したのは、イスラム教の持つ本質的な面が、それを受け入れさせるものを持っていたと言うことである。そして、それを、どの面を以てするかについては、色々議論のあるところではあるが、既に、見た如く、古い部族社会の掟を越えて、人々を平等な集団社会の共同体として再生させる集団主義とすることが、それをもたらしたと言えよう。

そう言いながらも、ササン朝ペルシアとの関わりでみられるように、陸路によるイスラム教の伝播は、それぞれの地域における既存の勢力ないしは体制との確執・摩擦を生み、時に、これを征服し、文明の破壊を見えるということにもなるため、そこでの問題は大きい。

そして、社会や国の体制を変えるのには、時間と労力がかかり、しばしば、多くの人々の血が流れる。

それでも、イスラム帝国の伸長は、歴史上、類を見ない程の素早さがあった。そこには、それをさせるための素地がイスラム教にあったと言うことになる。

もとより、アレクサンドロス大王の東西にまたがる征服によってもたらされた大帝国は、僅か10年と言う短い間のものであり、短時日にしては広大な領域を支配したと言える。

そして、歴史上、ヘレニズム文化と言われるものが、幅広い地域に行き渡った如く、短時日にしては、大きな影響を与えてはいる。

狭義では、イスラム教徒のアラビア人を、広義には、ペルシア人であれ、トルコ人であれ、



アラビア語を使うイスラム教徒のことをヨーロッパ人が、一般的に呼んでいたサラセン人、これは、アラブ帝国に対するイスラム帝国の呼称にもつながるとも言えるが、やがて、中央アジアで通商に携わっていたソグド人、ウイグル人等をもイスラム化していく。

そして、それは、やがて、唐との衝突を引き起こし、タラス河の会戦(751)でのサラセン軍側の大勝をもたらすと共に、イスラム教徒による中央アジアにおける勢力拡大に大きな影響をもたらした。この時、中国人からアラビア人へ紙の製法が伝えられ、やがて、それが、ヨーロッパへ伝えられることになる。

彼らイスラム教徒、それは、元々は、アラビア人であり、その後は、イスラム化したペルシア人、トルコ人、そして、ソグド人、ウイグル人等であるわけだが、彼らの中には、西の文明圏であるヨーロッパと、東のその中国、インドとの間にあって、東西を旅して交易を行い、中継貿易に従事し、利益を得て民族の繁栄を計ると共に、文明伝播の仲介をしていたのである。

それ故、当然の如く、彼らも、両文明圏の国々、民族に勝るとも劣らない、高い文化水準を保持していたのである。

ササン朝ペルシア滅亡後、中央アジア地方では、イラン系のサーマンSaman朝(874-999)が存在し、その太守がアフガニスタンのガズニに都を置いて国を興したため、その名がついたガズニGhazni朝(962-1186)が、アフガニスタン全域、ペルシアおよびトランスオキジアナの大部分、ならびに、パンジャブを領有した。



イマーム広場（イスファハーン・イラン）

第3代スルタンのマフムードMahmud (998-1030) は、度々、インドへ遠征して勝利を博したが、この遠征によって、イスラム教のインド進出の道が開かれたことになる。

7世紀中頃以後、分裂状態にあったインドにイスラム教が伝えられ、8世紀になると、アラビア人、ペルシア人、トルコ人、アフガニスタン人等の活動によって、更に、浸透して行くのであるが、「海の道」を介してのそれであって、陸路からのものは、もうしばらく後のことになる。

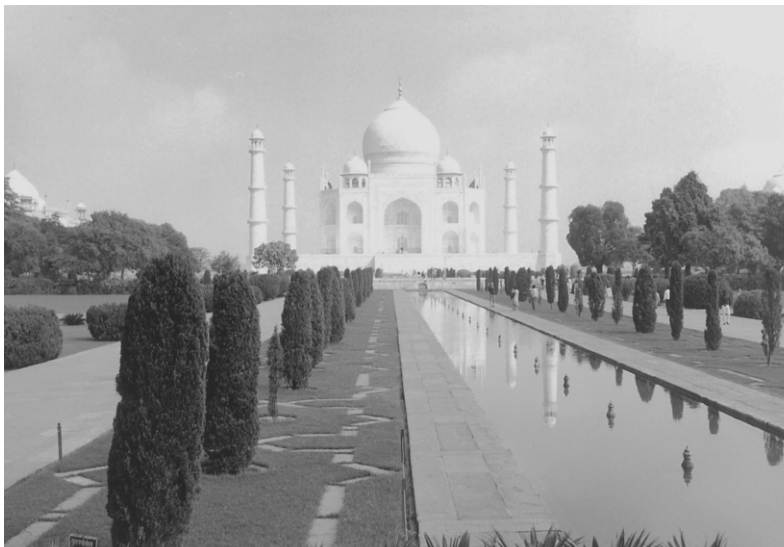
ガズニ朝を滅ぼしたゴールGhori朝 (1186-1215) は、偶像崇拜者にイスラム教を広めるために、インドを征服し、パンジャブを併合し、殆んどデリーに達する北インドを平定した。

そして、ゴール朝から独立して出来た奴隷王朝 (1206-1290) がデリーに都を置き、インド最初のイスラム王朝が成立したのである。

このように、イスラム教が誕生してからインドに至るまでには、おおよそ、600年の歳月を要したことになる。

インドに到達したイスラム教は、カースト制度に苦しめられていた人々の中から多くの改宗者を出しはしたが、ヒンドゥー (パラモン) 教徒との対立は激しいものがあった。

こうした中から、トルコ系のムガル帝国 (1526-1858) が誕生、310年余の歴史の中、同帝国中興の祖とも言うべき、アクバルAkbar帝 (1542-1605 在位1556-) は、民族を越え



タージマハール (アグラ・インド)

た世界主義的宗教を求め、ペルシア語やヒンドゥー語に基いた文芸を盛んにすると共に、各宗派の代表を集め、共通の要素を取り入れた独自の折衷的宗教を作ろうとした。

その後、厳格なイスラム教徒として、デカン地方の完全なイスラム化を計ったアウランゼーブAurangzeb (1618-1707 在位1658-) 帝は、異教徒をイスラム教に改宗させることこそ、自らが天から与えられた義務であるとして、熱心にこれを実行し、南部地方を除く、全インドをその支配下に置き、同帝国最大版図としたが、そのための度重なる遠征がその後の衰亡への道をもたらしした。特に、デカン地方でのヒンドゥー (バラモン) 教徒の集団であるマラータ同盟との戦いでは、手痛い敗北を喫している。

このように、陸上でのイスラム教の東漸は、武力を伴いながら、インドにイスラム政権が誕生するのに、600年、インド一帯をイスラム化するのに、イスラム教が興ってから1000年の歳月を要したと言うことと、その地理的範囲は、この辺りまでで止まってしまったと言うことになる。

従って、これより東の地域であるビルマ(ミャンマー)、タイ、カンボジア等の国々は、今日、仏教国と言うことで、イスラム教の影響は薄い。

もっとも、インドの東隣のバングラディッシュはイスラム教国ではあるが、インド圏と言うことになる。

現在、世界で一番のイスラム人口を持つと言われるインドネシア、そして、マレーシア、ブルネイ等の国々、また、東南アジアにおけるイスラム教の北限と言われている、フィリピンのミンダナオ島等では、イスラム教をそれぞれの国や民族の基盤としている。

これらの国々や地域へのイスラム教の浸透は、既に、述べた、古代以来、通商路となっており、後漢とローマ帝国との往来をなすための道筋としても使われた、「海の道」を経由してのそれだと言うところに意味がある。

8世紀には、前号で取りあげた、元々は、ジャワ島に興ったが、やがて、本拠をスマトラへ移し、一時期、東南アジア一帯に勢力を振るったシャイレンドラ朝の時に栄えた、シュリーヴィジャヤSrivijaya王国(7世紀後半-14世紀後半)に、イスラム教が伝えられていたと言われるのである。<sup>(16)</sup>

## 2

インドネシア地方へのイスラム教の伝播について、「インドネシアに於ける回教勢力の勃興はさして古いものではない。回教は、既に早くも8世紀の頃アラビアやインド商人によってスマトラのシュリーヴィジャヤ(室利佛逝)国のシャイレンドラ(山帝)王朝治下の領域に伝えられていた」<sup>(17)</sup>と言われるのである。

勃興はさして古いものではないと言われながら、既に、8世紀には、インドネシア地方にイスラム教が伝えられたと言うことで、イスラム教が興って100年程でインドネシア地方に伝播したことになるのである。

そして、当時、スマトラ（島）にイスラム教が伝えられた経緯が、南インドを経由して、アラビアやインド商人達によるものであり、陸上のルートを通り、同教の発生以来、600年の歳月を要し、政治や軍事、民族の興亡を伴って、インドに至ったと言うものによるのとは別のものであると言うことである。

そして、平和的に伝えられたと言うところにインドネシア、東南アジア地方のイスラム教の特徴があると言える。

イスラム教が興ったアラビア地方へのインド人による渡航、また、アラビア人のインドへの来航によって、特に、インド南部に、後に見る如く、同教が興ったと同じ世紀の7世紀と言う<sup>(18)</sup>、早い時期にイスラム教がもたらされ、そうしたものが、その後、東南アジア一帯、そして、インドネシア地方にも伝播していったのだと言うことを意味している。

もちろん、東南アジア、インドネシア地方からインドへ至るルートは、既に、古代以来、当然の如くとしての往来がなされていたので、これらの地方の人々が、インドへも出掛けていたわけで、相互の交通がなされていた結果によるものであると言える。

従って、陸地からによるイスラム教の東漸とは違い、組織的な集団、例えば、軍事力を以て、それを広めようとするのでもなければ、旧体制（王朝）の打到とか、領土の拡大とかと言う、政治的、軍事的なことを伴ったものでもなく、個人として、イスラム教を信仰していた商人や船乗りが各地を往来している間に、それが、自然のうちに伝えられたと言うことになるのである。

この点に関して、「彼等の海洋進出は、回教徒としての性格を一応認めるとするも、依然として商利を追求するが第一義であって、宗教の搏播はそれに伴ったものであると考えて差支へなからう。即ち、交易のため一定場所に住居を構へることになって自ら土着人との間にも通婚が行はれたのである。尤も、回教徒は異教徒との通婚を禁じてはゐるが、結婚を通じて改宗する場合が考えられ、更にその子を回教徒として養育する場合も併せ考へ得られる譯である。かくて彼等の宗教傳播は、通商による平和傳道であつたと云い得られる」<sup>(19)</sup>と言われるところである。

そして、更に、「7世紀ころから、アラビアのムスリム商人たちがインドに渡り、グジャラートやベンガルなどの地域の住民にイスラム教をひろめた。さらにまた、イスラム教に改宗した富裕なインド商人たちが東南アジアに行くたびに、この新しい宗教をヒンドゥー教や仏教にかわって採用することを説いたのである。そして、かれらの説得は充分権威があつた」<sup>(20)</sup>と言われるのである。

これらの記述から、東南アジアへのイスラム教の伝播が商人達による平和的なものであり、それも、富裕者のインド商人によったところに意味があるのである。そうした富裕者による信仰を見て、東南アジアの人々は、それを行うことによって、自らもそうした富裕者になり

得るのだと言う希望を持っても不思議ではない。

8世紀、シュリーヴィジャヤ王国の時代、スマトラ（島）地域に、インドネシア地方で始めてイスラム教が伝えられたわけであるが、それは、同教が興って100年程で、インドネシア地方に、それが伝えられたと言うことである。

陸地づいたと言いながらも、今日、盛んに言われるようになった、「海の道」を通して、それが、もたらされたと言うところに、この地へイスラム教の伝播の仕方が、他の地域へのそれとは違った特徴を持っていると言える。

海には自由がある。近代国家成立後は、領海等と言うようなややこしい問題が登場するが、古来、港に寄れば税を取られ、時に、賄賂を送らなければならないことはあっても、海を往来する者にとっては、海賊の難を避け、自然に従っていれば、陸路よりは、はるかに安全であり、楽であったと言えるのである。

「印度洋にあるのは、唯尠大な印度の存在であり、之が突出して、西はアラビア海と東はベンガル湾とに分けるに過ぎず、南は大洋に向って開放せられている。かかる状態ゆゑに、印度が回教に好意を持つ限り、印度洋における回教徒の自由な行動が許され、何の掣肘を受けることなく、東への途を辿り得たのである」<sup>(21)</sup>と言われる。このようなアラビア海、インド洋の様相と、インドにおける、陸上のそれとは違った、「海の道」を通ってのイスラム教の受容の仕方、例えば、アウランゼーブ王に見られる意図的な伝播の仕方とは違って、極く、自然な形で、それが受け容れられたこと、それが、イスラム教東漸の大きな特徴として挙げることが出来る。

そして、それは、東南アジア、特に、インドネシア地方におけるイスラム教の受容の仕方と、その在り方に大きく影響を与えていると言える。

「海の道」を通ってのイスラム教の伝播は、自然であったがために平和的であったと言うところに、その特徴があると言える。

それは、後の時代についても、同じことが言えるのであって、「1360年頃に到ると、單にアラビア人としてではなく回教徒としての彼等の雄飛が注目せられる。而して略々この時と同じく彼等の陸路よりする印度侵略が行われている。即ち、1363年カーシムに率ゐられてカイバル峠を越えて進入してゐるのであるが、ここに同じ回教徒でありながら、北方陸路よりするものは武力を用ゐてゐるに對し、南方回路よりするものは平和裡に事をすゝめている事實を見過すことができない」<sup>(22)</sup>と言われるところである。

もっとも、平和裡と言うことであれば、ヒンドゥー（バラモン）教、仏教についても、その伝播の仕方は同じだと言うことが出来る。

インドにおける奴隸王朝や、その後の続く、ヒルジー王朝（1290—1320）において、インド国内でのイスラム教の地歩が固まると、次第に、そこを足場にして、インドネシア地方へ



のその浸透が顕著になってくるのであるのだが、そこには、インドの西岸、マルバラ海岸とインドネシア、特に、地理的に近いスマトラ（島）を主とした地域との交通が頻繁に行われていたという事実が、それをさせたと言えるのと、それが、「海の道」を経てのことであると言うところにイスラム教のインドネシア方面への伝播についての特徴があると共に、この地方のイスラム教の持つ特色があると言える。

「海の道」は、陸のそれと比べ、特定のルートでなければならないと言うことは少なく可成り自由に目的地に達することが出来る。

もとより、海の難所と言う所もあり、避なければならない所もあるし、そして、港を経ながらと言う形でではあるが。

それをなし得たのが、「東南アジア諸国は海の男たちに対して、きわめて親切だった。風は穏やかで予想がつきやすく、5月から8月は西あるいは南から季節風が吹き、12月から3月は北西あるいは北東から季節風が吹いた。この地域の東側の境界に位置する台風地帯をのぞけば、ストームは船員たちにとって、たいした害にはならなかった。船員たちは一般的に、水路によっては、速い流れを嫌ったのである。水路は一定していて、その結果、ヨーロッパや日本へ旅するのはとても無理な船でも、東南アジアの水上では、何年にもわたって、うまく操縦することができた」<sup>(23)</sup>と言われるのである。

更に、「インド洋では、4月になると、西のモンスーンが吹き始め、インド大陸東岸に沿って、船をベンガル湾からビルマ方面へと送り込む。ここに達すると、船は、ヒマラヤ方面から吹く偏西風に乗って、マラッカ海峡へと針路をとる。5月には、この南西風はさらに発達して、海峡を越え、南シナ海からインドシナに達する。南西モンスーンは、7月には時速30ノットの最盛時に達する。それ以後減衰期に入り、10月には、逆に、東北風が南シナ海から下ってくる。この東北モンスーンのもっとも厳しい12月から翌年の2月にかけては、マラヤ半島東岸の航路が実質的に閉鎖状態となる。またこの風は豪雨を伴い、東海岸にしばしば洪水をもたらした。4月になると風向きが逆転して、新しいサイクルが始まる。』<sup>(24)</sup>と、この地域の海について、より詳細に述べられている。

こうした、インド洋におよびその周辺地域の自然環境が、必然的に、この辺りを往来する商人や船乗り達の活動を、そうした自然状況に従ったものにしたと言うことは当然である。

また、海の上と言うことから、陸地との連絡が難しいと言うことと、大規模な移動が出来にくいと言うことから、逆に、侵略を受けることもなかった。それが故に、「海の道」の開発が促進されたと言える。

こうして開発されていった「海の道」を、イスラム教徒は東進したわけだが、それとは逆に、アジアから西へ向った例としては、マルコ・ポーロMarco Polo (1254-1324)の帰国の経路が有名である。そして、また、明の武将、鄭和(1371-1434頃)は、1405年から33年



の間に、7回、大艦隊を率いて、東南アジア、インド南岸、西アジアを旅行し、その一部は、アフリカ東岸にまで達したと言う。そして、インドネシア地方について言うならば、パレンバンやアチェ等のスマトラ（島）、また、ジャワ（島）にまで、一行の者は来ているのである。

この鄭和の一事を以てしても、東西の交通、それも、「海の道」のそれが、如何なるものであったかが想像できる。そして、これは、バスコ・ダ・ガマVasco da Gama(1469頃-1524)のインド来航に勝るとも劣らない出来事と言える。それも、100年近くも前に。

鄭和の一行の中には、通訳としてイスラム教徒が同行していたと伝えられている。

最初、スマトラ（島）にもたらされたイスラム教は、特に、北端のアチェ、ここは、今日、インドネシア共和国からの独立を要求して、活動を行っていることから、日本でも、時々、ニュースに取り上げられているのだが、ここを根拠地として、同島の南部地域へと浸透されて行くと共に、海を越えて、マレー半島のマラッカ地域へも伝播して行ったのである。

これに対して、「アチーン地方に南洋流布の第一歩を踏み占めたと殆ど同時代或いはそれ以前既に回教はその南洋流布の根拠をベンクーレン地方に占めて居たと言い得るのである」<sup>(25)</sup>と、スマトラ（島）西北部にもイスラム教が早くから伝えられていたと言うことである。

いずれにしても、インドネシア地方では、スマトラ（島）の北部地域に、イスラム教が伝えられたと言うことである。

そして、「13世紀末には、前部インドの商人により、スマトラ島北部のブラルク国に輸入された。そして14世紀初頭には、その隣国、パセイ国、同世紀末には、パセイの對岸、マレー半島のマラッカ国と云うふうに、イスラム教は、疫病のごとく搏播していったのである」<sup>(26)</sup>と言われるのである。疫病のごとくと言うのは、表現の妙であるが、インドネシア地方へのイスラム教の伝播は、スマトラ（島）において、2の冒頭の引用文に見られる如く、さして古くはないと言われながらも、13世紀以降は急速な勢いで以て、浸透して行ったと言うことである。

このことは、陸地でのインドへの伝播とほぼ同時期に、スマトラ（島）にも可成り深くイスラム教が浸透していたと言うことを意味している。

そして、それは、更に、海峡を隔てたマラッカに至り、やがては、マラッカをして、イスラム教布教の根拠となす素地を作ったのである。

こうした、スマトラ（島）に始まった、インドネシア地方へのイスラム教の伝播は、この地方を支配していた大乘仏教を信奉し、仏教国として知られていた、シュリーヴィジャヤSrivijaya王国（7世紀後半-14世紀後半）の時代に当たっていた。同王国は、シャイレンドラ朝（9世紀中頃-11世紀初頭）の時が最盛で、首都であるパレンバンには、当時、多くのサラセン人や諸国の商人達が来航し、商業が栄え、海洋交易国家と位置づけられていた。<sup>(27)</sup>

更に、イスラム教のインドネシア地方への伝播については、時を経て、ジャワ（島）の中

部および東部に君臨し、最盛期には、西部ジャワを除く、今のインドネシア全域およびマレー半島の一部を支配し、故地である東ジャワの地名をとって国名となったマジャパヒトMajapahit王国（13世紀－15世紀初頭）との関わりが注目される。

中国からの帰国の途次、1292年に、インドネシア地方に来航したマルコ・ポーロはスマトラ（島）には、8つの王国があり、その一つ、東北部のフェルレク（ペルラク）王国には、イスラム教徒の商人が頻繁に訪れており、そのために住民はイスラム教に改宗していると述べている。<sup>(28)</sup>

だが、ジャワ（島）については、香料を主とした物資が豊富で、それらの取引で莫大な利益をあげて繁栄している様子を述べてはいるが、同島における、イスラム教徒の存在についてはふれていない。<sup>(29)</sup>

また、マルコより半世紀程後、1335年、同地域を訪れた、モロッコ出身のイスラム世界最大の旅行家イブン・バトゥータIbn Batuta (1304－77) は、スマトラ（島）で、スルタン・アル・マリク・アッザーヒルと対面したことについて述べているが、ジャワ（島）については、異教徒の国であると記している。<sup>(30)</sup>

これに従えば、彼がインドネシア地方へ来た頃、ジャワ（島）地域は、未だ、イスラム教の影響はなかったと言うことが出来る。

マジャパヒト王国は、名宰相ガジャ・マダGaja Mada（？－1364）を起用し、同国の繁栄をもたらしたハヤム・ウールクHayam Wuruk王（1334－89 在位 1350－）没後、衰退に向うことになる。

8世紀にアチェやベンクーレン地域のインドネシア地方にもたらされたとは言え、東南アジアにおけるイスラム教は、交通の要衝として繁栄していたマレー半島のマラッカがその中心地となっており、マジャパヒト王国には、そこを経由して、インドやサラセンの商人によって、14世紀頃からもたらされるようになったのである。それも、次に、見る如く、同王国の衰退化と連動して。

一国を左右することにもなり得る宗教の浸透は、その時の政治体制の在り方と大きな関わりを持っており、ローマ帝国におけるキリスト教の公認（313）は、その典型と言える。

「モジャパイト王国の勢威が昔のごとくでなかったから、イスラム教の侵入を防ぐ力も、それだけ弱かったわけであり、こう云うわけで、イスラム教は、15世紀以来、まずマラッカを通り、また、直接前部インドないしペルシアの商人を通じてジャワへ伝播し始めたのである」<sup>(31)</sup>と、マジャパヒト王国の衰退と、同国へのイスラム教伝播とが関連していると言うのである。

こうして、同王国へのイスラム教の受容は着実に行われていった。

ケタルビジャヤ王（在位1447－51）の時代になると、王妃が熱心なイスラム教の信者だっ

たと言うように、王室を始めとする、支配階級の間に、信仰する者が増えていったため、同王国における、同教の浸透は早まっていった。

それと共に、イスラム教が持つ本質的な側面、即ち、ヒンドゥー（バラモン）教や仏教のそのような、静寂で遁世的な傾向に対して、イスラム教の持つ活気に満ちた特徴は、進取の気性と自覚心に富んだジャワの人々には受け入れやすかったと言われるのである。<sup>(32)</sup>

こうして、イスラム教が受け入れられれば受け入れられる程、マジャパヒト王国の衰退を早めることになるのではあるが。

しかも、そのイスラム教も、本来のそれとは違って、インドにおいても、ヒンドゥー（バラモン）教ないしは仏教的に色づけされていた如く、ジャワ（島）においても、それが、受け入れられやすいように、ジャワが古来持ち続けてきた原始的な靈魂崇拜と言ったアニミズム的要素を根底に残しての浸透であったので、容易に受け入れられたのだとも言われている。<sup>(33)</sup>

そして、また、ヒンドゥー（バラモン）教や仏教に見られるように、排他的な面がないため、一般民衆的信仰として受け入れやすかったと共に、先述の如く(12頁)、イスラム教をもたらしたのが、富裕な商人であったため、彼らの影響は大きかったわけである。

また、「ジャワ島における原住民の改宗が進んだのは、シーア派第4代目のイマームのザイン＝アル＝アビディーンの後裔と伝えられるマリク＝イブラーヒームが、北海岸東部の港市グレスイクによって伝道を開始した14世紀の後半からである。マリク＝イブラーヒームは1419年に没してグレスイクに葬られたが、ジャワ島に初めてイスラムの福音を伝えた聖者として、現在に至るまで彼の墓には参詣の信者の列が絶えることがない」<sup>(34)</sup>と言う、先駆者による布教活動があったことを忘れることは出来ない。

東ジャワの湾岸都市として、古くから栄えていたグレスイクは、中国人で居住する者も多く、東方の香料産地とマラッカとを結ぶ東西交通の要衝をなし、中継貿易港として繁栄17世紀初頭まで、同島最大の湾岸都市であった。

そのため、当然の如く、マラッカ経由で多くのインドやサラセンの商人達が来訪、それに伴ってイスラム教も自然のうちにこの地にももたらされることになり、その中には、マリク・イブラーヒームのような者がいても不思議ではない。

従って、ジャワ（島）と、その周辺地域へのイスラム教の布教は、スマトラ（島）のそれ同様、政権による強制的なものではないと言うことを物語るものである。

そして、「マリク＝イブラーヒームの没後、(中略)イスラム教徒の小政権は、次に述べるマライ半島のマラッカ王国との貿易を経済基盤とし、相互に姻戚関係を結び、中部ジャワによったデマグ王国を盟主とする連合体を結成した。このイスラム政権の連合体が、マジャパヒト王国とパジャジャラン王国を滅ぼしたのは16世紀の初めのことであった」<sup>(35)</sup>と、指摘されるのである。

東洋史辞典（京都大学編 東京創元社 昭和49）にも載っていないような小勢力が、西ジャワを除く、今日のインドネシア地方とマレー半島の一部を支配し、ジャワ史上空前の大国だったマジャパヒト王国を倒したのである。

その上、同王国が支配し得なかった西ジャワのパジャジャラン王国をも滅ぼし、インドネシア地方が、イスラム教化する素地を作ったのである。

16世紀になると、マジャパヒト王国が末期の様相を呈し、国内に小勢力が分立し、その中から、バンタムBantam 王国が誕生するのである。

16世紀始め、スマトラ（島）パセイ出身で、バンタムに來住してイスラム教布教に努めたファラテハンFalatehan（年代不詳）はデマ王国の王女と結婚し、土侯となったが息子のハサヌッディーン（年代不詳）の時、同国より独立、バンタム王国（16世紀中頃－19世紀初頭）を樹立。更に、その息子のユスフYusuhf（年代不詳）の時代にパジャジャラン王国を滅ぼし、西ジャワを統一した。

ファラテハンとは、ジャワのイスラム教徒からは聖人として尊敬されていると言う。

目を東に転ずると、ジャイレンドラ朝がジャワを去った後、その故地に、9・10世紀に栄えたそれとは別だが、同名のマタラームMataram 王国（16－18世紀）が誕生した。

16世紀中頃、マジャパヒト王国では、治下の小勢力が分立して戦争を繰り返していたが、その中から、1586年、マタラームの土侯だったスタヴィジャヤ（年代不詳）が国土を統一して、マタラーム王国を建設した。

同王国は、港湾貿易をオランダ東インド会社により独占されたため、国是として、内陸国家としての道を歩み、それに従い、統治の基盤を内陸に置き、そのため、イスラム教の浸透についても、政治の在り方に付随するところがある点がその特徴と言える。

内陸部への統治の浸透と共に、ウラマー（イスラム法学者、宗教指導者）が、草深い農村各地に派遣され布教に努めた。<sup>(36)</sup>

そう言う点では、言ってみれば、政治と結びついた、上からのイスラム化であり、これまでのインドネシア地方での同教浸透とは、趣きを異にしていると言える。

一方、15世紀初頭、シュリーヴィジャヤの王族と言われ、パレンバン（島）の貴族パラミシュワラ（パラメスワラ 年代不詳）がマラッカに国を建てた（マラッカMalacca王国 1402）が、海上交通の要衝、マラッカ海峡を擁しているということから、建国後20年にして、活発な商業活動の展開を見せたため通商の拡大に伴い、マレー半島の西岸を始め、半島全域、ジャワ（島）北岸、モルッカ（香料）諸島に至るまで、その勢力を伸した。

支配者であるパラミシュワラが、スマトラ（島）のイスラム国パセイの土侯の娘と結婚したことや、マラッカ在住のインド商人の影響によって、マラッカ王国はイスラム化し、やがて、同王国は、東南アジアにおける一大イスラム教国へ発展をして行くのである。



マラッカ（マレーシア）

従って、「15世紀の終るころまでには、東南アジアの中心的商業国家に発展した。しかも16世紀のはじめには、ポルトガル人にいわせれば、全世界でもっとも富み栄えた海港となった」<sup>(37)</sup>と言われる繁栄振りを示していたのである。

そして、一時期、東南アジア一帯の交易圏の中心であると共に、東南アジア世界における、イスラム教の布教センターでもあった。

「14世紀を通じて、スマトラ西海岸で足踏みさせられていたイスラームは、15世紀にはいると、マラッカを新しい布教センターとした。マラッカ王がイスラームに改宗したのは15世紀中頃といわれる」<sup>(38)</sup>と言うのである。

また、「ムスリムの国家になったとしてもそこには以前のインド化したいろいろな伝統が混合していたということである。ちなみに王室の儀式などには依然ヒンドゥーの特徴が残っていた。それはともかく、新旧文化の重層のなかで、ムスリムの商業活動をとおして、遠くヨーロッパに開く、東南アジアの窓になったという意義はきわめて大きい。また、だからこそ、東南アジアの十字路としての要地の意義も倍加し、マラッカを制するものは東南アジアを制すといわれるほどであったのである」<sup>(39)</sup>と、文化の重層性と、地理的な重要さによる、マラッカ王国の特徴が指摘されるのである。

その点では、今日においても、特に、その地理的重要性は変わらず、東西交通路の要めとなっており、日本経済にとってもマラッカ海峡は不可欠な大動脈となっている。その辺りで、前号でふれた如く、流通の原点である、「通商か、さもなくば、掠奪か」と言うことから、パジャジャラン王国時代、海賊を生業をしていた者が多かったと言うことであつたが、今日で



も、東西交通路の要衝と言う点で、多くの船舶が往来しており、そこを狙った、海賊が出没し、それが、国際問題として取り上げられている。

そして、ここから、マジャパヒト王国へのイスラム教の布教がなされ、それによって、各地域における領主（土侯）達が改宗して行き、イスラム教が、ジャワ（島）に浸透して行ったのである。

それ故、マラッカとジャワ（島）との文化が融合されて行ったと言われるのだが、一方では、ヒンドゥー（バラモン）教を奉じていた、マジャパヒト王国の終末を早めることにもなったのである。

そして、「マラッカ王は、アレクサンドロス大王の系譜をひくものとされ、スルタンとして、この東南アジア・イスラーム圏に比類なき位置を与えられた」<sup>(40)</sup>と言われるのである。

紀元前4世紀のアレクサンドロス大王の東征は、今日、その名を各地に残し、アジアにおいても、色々な所に、彼の子孫を名乗る者、また、彼に憧れて、自らにその名をつけている者がおり、彼が足を踏み入れたとは思われない、東南アジアでも、その傾向は見られる。その典型が、マラッカ王国のスルタンと言えるのかも知れない。

マラッカ王国の建国伝説では、その王統は、パレンバンのスリ・トリ・ブアナに始まるとされ、彼は、アレクサンドロス大王の血筋を引いていると言うのである。

アレクサンドロス大王が、遠征中にインドの王女に生ませた子孫が、インドの王として東南アジアを攻略した際、マラッカ海峡地帯のグラン・ギ国の王女を妻に迎えたことに遡り、何代か後に、スリ・トリ・ブアナが、兄二人と共に生まれ、兄達もそれぞれミナンカバウ、タンジョン・ブラの王となり、自らは、パレンバンの王となったのだと言うのである。<sup>(41)</sup>

本研究ノートの主題である、バリ（島）の王族、オカ・シラグナダ氏の家系についてもその始まりが、17世紀に遡るとは言え、その始祖については、伝説に属しており、歴史事実と、伝説とを、どう言う形で整合性をもたせるかと言うことについて、今後の課題になるところである。

従って、マラッカ王国においても、その歴史事実と、伝説の部分とをどう糺り合わせるかと言うことになるが、スリ・トリ・ブアナの子孫と言う王統は、アレクサンドロス大王の子孫を認めているのである。

そして、2代目の王、ムガトは、イスラム教に改宗して、イスカンドル・シアーと称したと言う。<sup>(42)</sup>

今日、アレクサンドロス大王の征服地での彼の呼び名として、イスカンドルとか、イスカンドルと言う名前が使われているが、この呼び名は、可成り広い範囲に行き渡っており、現に、バリ（島）にも、イスカンドル姓が存在する。

こうした、東南アジア、特に、ジャワ（島）、スマトラ（島）を中心とした、インドネシア



地方へのイスラム教の伝播の過程において、バリ（島）では、どのようなことがあったのか。それが問題なのである。

そして、それは、バリ（島）が占める、政治的、経済的立場と関わりがあると言えそうである。

特に、イスラム教が、サラセンや、インドの商人達によってもたらされたと言う経緯を考えれば、バリ（島）の持つ経済的特性が大きな問題であると言うことは当然のことである。

それについては、現在のバリ（島）は観光地として、世界の国々から多くの観光客を集め、そのために整備されたホテル等の施設の充実から、しばしば、重要な国際会議が開催されている。従って、バリ（島）においては、観光が重要な経済基盤をなしていると言える。

それでは、果して、イスラム教伝播の過程ではどうだったであろうか。

この点について、農業よりも商業に、その経済の基盤を置いていたイスラム教が盛んとなった16世紀に西ジャワに栄えたバントム王国では、周辺各地から、商取引のため、また生活上に必要な物資を集め、そうして集めた物資を消費をしたり、また、仲継貿易の資としたのである。

こうした物資の流通と言う観点から見ると、バリ（島）からもたらされる物産としては、樟と被服だったと言われている。<sup>(43)</sup>

これらの品物が、当時、どれだけ、魅力的な物であったかは分らないが、他の地域のような、米、香辛料、香木、密、砂糖と言った品々と比べ、果して、どの程度の価値があったと言えるのだろうか。

商人や船乗りを介して、自然の形で浸透してきたイスラム教故に、こうした経済的立場を持つバリ（島）は、他の地域と比べて、どれだけの人々を引きつけたか疑問を生むところであり、こうしたことが、イスラム教のバリ（島）への伝播にも反映していると言えるだろう。

そして、前号で見た如く、時に、バリ（島）からジャワ（島）に働きかけをすることはあっても、その存在の多くは、ジャワ（島）の影響下にあったことは否めず、特に、政治面にあっては、ジャワ（島）の主導権は明白である。

「西部ジャワに存在していたパジャジャラン王国が、1579年に、バンテン王国に併合された後に、二大強国を除く独立国プランバガン国が東隅のバリに、イスラムに染まない地域として残っていた」<sup>(44)</sup>と言われるのである。

これまで見てきたように、イスラム教の伝播が、サラセンやインドの商人、そして、やがては、イスラム化した東南アジアの人々によってなされたと言うこと、商人達は、古今東西を問わず、利のある所には、危険をかえりみず、出かけて行くということについては、本稿の1で見た如く、紀元前の時代においても既に、見られたところである。

商業活動にとって利益を追求すると言うことは至上命題であり、それと共に、それが自由

に行えると言うことが、これまた、重要なことである。

そして、それは、スマトラ（島）、ジャワ（島）等のインドネシア地方についても言えることで、特に、これら二つの地域においては、イスラム教の浸透の状況から見ても、活発に行われていたと言える。

これらの地域は、既に、見てきたように、早くからイスラム商人が来航し、交易に従事すると共に、自然の形で、イスラム教が浸透して行ったのである。

だが、何故か、バリ（島）においては、他の地域に見られるような、彼らの活発な活動が見られない。

それは、彼ら、商人達をして、活発に活動をさせない、何かがあったものと思われる。

やはり、バリ（島）は、商業活動を活発に行わせるには、魅力が乏しかったと言わざるを得ないところがあったと言うことだろう。

先述の如く、利益を求めて、危険をかえりみずに、活発に活動をする商人の一人として、自らも、交易に携わっていた、マホメットが生み出した、イスラム教は、それが故に、活気に満ちたその特徴が、進取の気性に富んだジャワの人々に受け入れられやすかったと言われるのとは反対に、ヒンドゥー（バラモン）教や仏教が持つ、静寂で遁世的な傾向がバリの人々の気持ちに合っていたのだと言えよう。

それが、結局は、バリ（島）をイスラム化させなかった理由となるのではないだろうか。隣のジャワ（島）にまで来ていてである。

とは言うものの、今日、バリ（島）にもイスラム教徒はいるし、モスクもあり、アザーン（祈りの呼びかけ）の声も聞く。だが、他の地域と違って、大勢を占めるには至らなかったのである。

相変わらず、「バリ・ヒンドゥー（バラモン）」を保っている、バリ島なのである。

### おわりに

こうした、歴史的背景を見ると、インドネシアと言う国が、その一部をなす、ジャワ（島）、スマトラ（島）中心で見てみても、その多様性が知れる。

今日、インドネシア共和国からの独立を希望しているアチェにしても、元々、スマトラ（島）の中とは言うものの、独立不覇の民族として、ヨーロッパの支配に属せず、アチェ王国時代の17世紀には、スマトラ（島）全域を支配する力を持っていたのである。

そして、その後も、イギリスやオランダの支配に度々抵抗を示したのである。

こうした、歴史的背景を持つ同地域だけに今日、インドネシア共和国の枠の中におさまっていることが難しいと言えるのかも知れない。

また、8世紀に、早くも、インドネシア地方では初めてのイスラム教受容を行っている。

この点からしても、この地域の人々は、開明的で、進取の気性に富んでいるのかもしれない。

それに、彼らの活動の場としての海は、自由の空気が横溢しているのである。

それに対し、インドネシア地方の東のはずれとも言えるバリ(島)、ここは現在に至るまで、ヒンドゥー(バラモン)教を堅持している所である。

彼ら、バリ(島)の人々にとって、山は神聖性が宿る所であり、噴火によって、度々、災害をもたらす、アグン山、これを聖なる山として崇め、信仰の対象としているのである。

そして、それとは対局的な存在としての海があるのである。

こうしたところに、バリ(島)にイスラム教が広まらなかったことの鍵があるのではないかと考えられる。

(続く)

拙稿を、研究仲間だった、故、森宗平先生の霊に捧げます。

#### 注

- (1) L.Guyo, 'LES 'EPICES' Collection QU SAIS-JE? No1040 池崎 平山 八木共訳『香料の世界史』白水社 1997 15頁
- (2) C.Hude, 'Herodoti historiae' 2 Vols. Oxford Clasical Texts 松平千秋訳『ヘロドトス 歴史』上
- (3) 長澤和俊『アレクサンダーの戦争』(長澤和俊編『世界の戦争』 1 講談社) 1985 219頁  
アレクサンドロスの東征, 特に, インドについては, APPIANOS 'ΑΛΕΞΑΝΔΟΥ ΑΝΑΒΑΣΙΣ ΙΝΔΙΚΗ' 大牟田章訳『アレクサンドロス大王東征記』(上・下) 岩波文庫 2002 の(下) 付インド誌に述べられている。
- (4) H.L Jones, 'The Geography of Strabo', 8 vols., Loeb Classical Library 飯尾都人訳『ストラボン ギリシア・ローマ世界地誌』龍溪書舎 1994, 7
- (5) H.B.Wethered, 'the Natural History' 中野里美訳『古代へのいざないープリニウスの博物誌』雄山閣出版 1990 254~7 頁
- (6) 村川堅太郎訳注『エリュトゥラー海案内記』生活社 1946
- (7) 'Claudii Ptolemati Geographia' 織田武雄監修 中務哲郎訳『プトレマイオス 地理学』東海大学出版会 1986 123頁
- (8) 羽田明監修『アジア史講座』第6巻 岩崎書店 1957 166頁
- (9) 同上書 170頁
- (10) 同上書 169頁
- (11) 岡島誠太郎『回教海事史』天理時報社 昭和19年 38~9 頁
- (12) 同上書 45~7 頁
- (13) 小林多加士『海のアジア史』藤原書店 1997 82頁
- (14) 同上書 82頁 そこに、普遍性があり、世界宗教たり得るところがあると言うのである。
- (15) 岡島 前掲書 44~5 頁
- (16) 和田久徳「東南アジア諸国の成立」『岩波講座 世界歴史 3』1970 471頁

- (17) 回教圏研究所編『概観回教圏』 誠文堂 新光社 昭和17年 279頁
- (18) 河部利夫『東南アジア』（世界の歴史） 18 河出書房新社 昭和49年 115頁
- (19) 岡島 前掲書 97～8 頁
- (20) 河部 前掲書 115頁
- (21) 岡島 前掲書 124頁
- (22) 同上書 96頁
- (23) A.Reid, 'SOUTHEAST ASIA IN THE AGE OF COMMERCE 1450-1680'  
Yale Univ.Press 1988 平野・田中共訳『大航海時代の東南アジア』 I 法政大学出版局  
1997 2～3 頁
- (24) 鶴見良行『マラッカ物語』 時事通信社 1994 34～6 頁
- (25) 瀬川亀『南洋の回教』 南洋協會 大正11年 15頁
- (26) 小林良正『東南アジア社会の一類型ーインドネシア社会構成史』 日本評論社 昭和24年 33  
頁
- (27) 鶴見 前掲書 30頁
- (28) H.Yule&H.Cordier'The Book of Sir Marco Polo' London 1921 青木富太郎訳  
『マルコ・ポーロ 東方見聞録』 社会思想社 昭和50 173頁
- (29) 同上書 171～2 頁
- (30) イブン・バットゥータ 前島信次訳『三大陸周遊記』 河出書房 昭和30 323～5 頁
- (31) 小林 前掲書 34頁
- (32) 同上書 35頁
- (33) 同上書 35頁
- (34) 嶋田襄平『イスラム教史』 山川出版社 1978 274頁
- (35) 同上書 274
- (36) 同上書 276頁
- (37) 河部 前掲書 128頁
- (38) 桜井・石澤・桐山『東南アジア』 朝日新聞社 1997 115頁
- (39) 河部 前掲書 129頁
- (40) 桜井他 前掲書 116頁
- (41) 鶴見 前掲書 108～10頁
- (42) 嶋田 前掲書 274頁
- (43) 小林 前掲書 43頁
- (44) 河部 前掲書 119頁

もともと、14世紀にはマジャパヒトの王妃ウィジャヤ（年代不詳）の甥ラーマ（年代不詳）の  
長子カリフリ（年代不詳）がバリ（島）にイスラム教を布教したと言われている。（瀬川 前掲  
書 19～20頁）

Research Note

## The Social Climate and Linage in Bali

Masamichi MATSUBARA

This time, I try to research the penetration of Islamic to Indonesia area. Especcially, Smatra, Jawa and Bali.

At the 8th century, Islamic came to Smatra, Ache from India by saracen and Indian merchant with their trading activity.

The penetration of Islamic to the Indonesia area began at the 14th century regularly from Maraca by saracen and Indian merchant.

Because, Maraca was the center of Islamic in Southeast Asia in this era, many many of Islamic people (muslims) from Maraca went to the regeons of Smatra and Jawa to propagate Islamic. So, the Indonasia area changed to the Islamic world gradually.

Therefore, Indonesia is an Islamic country, now. But there are many religions, Christianity, Hinduism, and they will be soon in Indonesia.

